

かかりつけ薬局、地域に根 めざせ健康の指南役

2015/6/2付 | 日本経済新聞 夕刊

薬や健康についての相談ができる身近な「かかりつけ薬局」をつくらうという動きが注目を集めている。薬の飲み残しを減らしたり、たくさんの種類の薬を飲むことで起きる副作用の危険性を下げたりするのが狙いだ。病気の予防や地域住民の健康を守る拠点になろうと、動き出している薬局の姿を追った。

大阪府吹田市の阪急・南千里駅前の千里プラス薬局に昨年12月、高齢者ら地域住民が集まる交流ルーム「ピアプラス」ができた。「この春で体重が3キロほど増えてしまった。好きな豆の食べ過ぎとちゃうかな」と市内に住む女性(75)が聞くと、管理栄養士の女性店員が煮豆の砂糖の量を控えるよう助言している。

別の女性客(72)は店長の田淵晴代さん(50)のハンドマッサージを受けながら、持病の高脂血症やヒザのリハビリの状況を話していた。「この薬局は何でも真剣に聞いてくれる安心感がある。自然に話したくなるわ」という。

「処方箋がなくても誰でも気軽に立ち寄れる薬局にしよう」。薬剤師で社長の大森由子さん(50)は2013年冬にスタッフに宣言した。研修で訪れたドイツの薬局が印象深かったからだ。薬剤師たちがクリスマスにサンタクロースにふんして贈り物を渡す。地元の子どもたちは歌でお返ししていた。

宣言から1年半、35人のスタッフはアロマ検定や認知症サポーターなど合わせて約30種類の資格をとった。薬膳料理教室を開いたり、子ども向けの薬剤師体験をしたり。店内にはスタッフがダイエット挑戦記録を張り出し、「ダイエットの調子はどう？」と利用者が声を掛けやすい雰囲気づくりを進める。

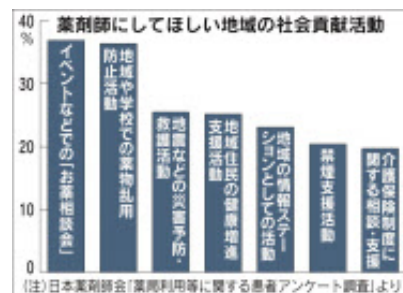
コンビニ上回る

国内には調剤薬局が約5万7千店ある。コンビニエンスストアの数より約1割多い。多くは医療機関の近くに店を構え、約7割が1つの医療機関の処方箋に依存する経営だという。このため薬局は医師の処方通りに薬を出すだけで、どこも同じだと感じる患者は少なくない。

千里プラス薬局の大森さんは「早く間違えずに調剤することが使命になりがち。閉塞感を感じている薬剤師は多いはず」。利用者が楽しめるサービスやイベントを考えることで、社員の意



毎回使う薬を一目で確認できるカレンダー型の袋に入れる三谷さん(千葉県松戸市の中島さん宅)



識が前向きに変わったと感じている。

東京都足立区の梅田調剤薬局は入り口に「糖尿病、早期発見」の貼り紙を掲げる。店内の簡易ブースでは薬剤師の説明を聞きながら、利用者自ら指先から微量の血を採って糖尿病を判定する数値を検査できる。診断こそできないが、数値が高い人には医療機関の受診をすすめる。

主婦や個人事業主は定期的な健康診断を受ける機会が限られる。薬を取りに来た無職男性(38)は「薬局でこんな検査ができると初めて知った。健康診断に行く機会がない人は多いので助かるはず」。

薬局では昨年4月から店頭検査ができるようになった。料金は足立区民の場合、1回500円。薬局長の浅見恭史さん(38)は「病気になってから医者にかかるのではなく、日ごろから気軽に健康をチェックする場所として活用してほしい。足立区は糖尿病患者の1人当たり治療費が23区内で最悪の水準にある。少しでも薬局として対策に役立ちたい」と話す。

治療から予防へ

医療は「治療から予防へ」と変わっている。東京医科歯科大学大学院の川渕孝一教授は「健康は自分で守ることが求められる。病院より気軽に入れる薬局が、病気の予防や早期発見に力を発揮する健康の水先案内人になるべきだ」と話す。役立つサービスを提供すれば、競争が激しい薬局の生き残りにもつながると説く。

「こんにちは、薬局で一す」。千葉県松戸市の友愛薬局小金原店の薬剤師、三谷貴子さん(44)は5月下旬、中島正広さん(40)を訪ねた。23年前の交通事故で寝たきり生活が続くため、2週間に1度薬を届ける。

筋肉のこわばりやつっぱりを和らげる薬、ぜんそくの発作を防ぐ薬など11種類の薬を持ってくる。中島さんは薬が飲めないため、家族が器具を使って投薬する。三谷さんは家族に中島さんの体調や薬の効き具合を詳しく聞き取る。中島さんの姉(42)は「薬を扱うのは大きなプレッシャー。しっかり管理して助言してもらえるのは心強い」と話す。

三谷さんが特に意識するのは医師や介護士とチームでの支援だ。中島さんの体調を記録したノートを共有し、携帯電話で連絡を取り合う。「日ごろから信頼関係を作っておくと、薬が合っていない、変更してはどうかなどと提案しやすくなる」という。

薬剤師の在宅対応は人手の負担が大きく、採算が合わないという声は多い。ただ患者の生活にかかわることで意識が高まり、幅広い医療知識を得る効果は大きい。日本薬剤師会(東京・新宿)の11年のアンケート調査では、薬剤師の約9割が在宅医療に関わることを前向きに捉えている。

日本大学薬学部の亀井美和子教授は、かかりつけ薬局の条件として「健康相談や患者の服薬管理がしっかりできること。医師と連携して患者や地域医療に積極的にかかわる姿勢が欠かせない」と解説する。我々が薬局を選ぶときには薬剤師にどんどん質問すること。「質問や

相談に親身に対応してくれるか、問題を解決しようという姿勢があるかを判断する」と話している。

(高田哲生)

NIKKEI Copyright © 2015 Nikkei Inc. All rights reserved.

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。